

介護等体験実習 に向けて

教育実践とストレンクス

文学部 人間関係学科

准教授 尾口 昌康

平成28年度から「介護等体験」の事前学習に関わるようになり、5年が経ちました。最初の頃は初めての担当ということもあり、かなり緊張して臨んだのですが、今年は「どんな先生の卵とお会いできるのだろう」と楽しみに講義を担当させていただきました。さて、昨年は少々堅苦しい内容で書いてしまったため、今回は少し気楽に読める文章を、と思っています。

私は大学を卒業して今春でちょうど22年になります。小中高、そして大学・大学院で自分が受けてきた教育を振り返ると、様々な先生との「出会い」がありました。その中で共通して言えることは、「好きな先生の担当科目は好きになり、苦手な先生の担当科目は苦手になってしまう」ということです。おそらく皆さんも同じ経験をしたことがあるのではないのでしょうか。それは単に、授業が上手い、下手と言うよりも、児童生徒の視点に立った授業やかかわりが出来ているか否かということだと思います。残念ながら私は、高校まではあまり好きな先生・尊敬できる先生と出会うこともなく、さらに学業面でも強い関心を持つ科目もないまま、無目的に勉強させられているような感覚だったのです。

そんな私も大学に入学して、ある先生との出会いで少しずつ変化することが出来ました。幼少時から風変わりな「何故おまえは人と同じように出来ないのだ！」と言われ続けていた私に対し、先生は「オ



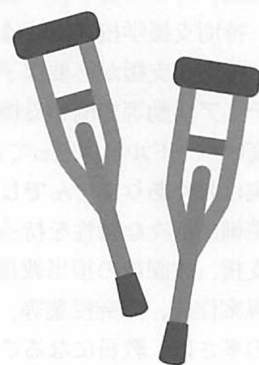
リジナリティがあるね」という評価をしてくれ、一般的には「ピントがずれている」と思われる私の発言に「他者には気づけないユニークな視点だね」と返してくれました。

その先生との出会いによって、劣等感の塊の私は知的好奇心を掻き立てられ、多くの専門書を読み知識を深め、精神保健福祉の領域で実践を重ね、社会人大学院生として研究にも手を広げ、今の私が存在するのです。

少し話は飛びますが、近年社会福祉の領域ではストレンクス (Strength) という、その人の得意分野や、持っている能力を活かすという考え方が浸透してきました。私が大学時代に出会ったその先生は、社会福祉のテキストにストレンクスという言葉が存在しない頃から、教育の中で実践されていたのです。

さて、話は得意科目・苦手科目に戻りますが、私はさらに勉強を続けるうちに、自分の得意科目と苦手科目はお互いリンクしていることに気づいたので。もっと言えば、得意分野を伸ばすには、どうしても苦手科目の知識が必要、頑張っって苦手科目の知識を身につけると、得意科目の知識が豊かになるということです。苦手科目に着目し努力して克服しようとするよりも、その方がずっと楽しいはずで

人は誰も、好きなことや興味のあることなら頑張ることが出来ます。教育実践の中に上手くストレンクスの考えを採り入れた授業や指導が出来る先生になっていただければと思います。



共に感じ、学び、考え合う

文学部 人間関係学科

教授 長尾 秀吉

皆さんは将来、学校の先生になることも視野に入れて教職の勉強を重ねていることと思います。ここで、一言ですが、先生をめざして頑張っている皆さんにメッセージを送りたいと思います。それは、



タイトルにあるように「共に感じ、学び、考え合う」ことを大切にしてほしいということです。

私は、別府大学に赴任して社会教育・生涯学習関連の科目を教える教員になり、18年目になります。ですが、最初の3年ほどは、毎日「辞めたい、教師に向いていない」と思っていました。15年目の今日まで、日々授業案づくりをしていますが、特に最初の3年は、睡眠もろくにとらず、テキストと向き合いながら「このことについて、このように教えよう。そのためにはどうすればよいか…」をずっと考えていました。

それで、私が一生懸命に考えて教えようとした結果、どうなったと思いますか？なんと、熱心に教えようとするほど学生が寝るという事態が起きました（苦笑）。1年目は「まだ未熟だから」と自己弁護していたのですが、2～3年目になるとさすがに「どれだけ努力しても自分には教える力がないのだ」としょんぼりせざるを得ませんでした。

当然、行き詰まってしまったのですが、ちょうどその時に大病し、ろくに動けない状況に陥りました。そこで、「今までみたいに授業ができないから、せめて自分自身が本当に考えたいことだけを話そう」と心がけました。時間も短く、声も小さく、伝える内容も少なかったのですが、学生は不満だろうと予想していました。ですが、実際はなんと学生が起きて聞いてくれたのです。これにはびっくりしました。その後、ようやく「これまでの自分は『教えて

あげよう』としていた」ことに気づきました。学生に学び、考える力があることを信頼しておらず、自分が導かねばと思っていたのです。だから孤立したのです。

生徒は教師から知識だけを得ようとしているだけではありません。教師と静かにコミュニケーションをしようとしています。自分の顔を見て話してくれているのか、挨拶してくれたか、教師は何についてどのくらい本気で語っているか、信頼してくれているか…。

これは、教育や福祉に限らず、どのような場面でもコミュニケーションとして当然求めているものです。自分が誰かに「してあげる」ことは、その人が問題解決できることを信頼せずに、その人の苦勞を奪うことにもなります。そうではなく、自分自身をさらけ出して「自分はこう思うが、あなたは思う？」、そんな風に共に感じ、学び、考え合うことができる関係づくりを心がけて実習に臨んでほしいと思っています。

